

兵庫県におけるオープンガーデン活動団体の実態に関する研究

-兵庫オープンガーデンネットワークを事例として-

4. 環境工学-21. 環境設計-q. 住民参加

正会員 ○ 上山 肇^{*1}

公私空間 オープンガーデン 協働 コミュニティ形成

1. はじめに

都市において緑を活用した公私空間のあり方を考えるときに、その活用の仕方には様々な方法(工夫)がある。オープンガーデンの取り組みもその一つであるが、兵庫県では早い時期からこの「オープンガーデン」の取り組みが県内の複数の地域で行われており、地域の景観形成やコミュニティ形成、更には地域の活性化に影響・効果を及ぼしてきた。

本稿では実施団体が多く存在する兵庫県を事例に、中心的に活動している兵庫オープンガーデンネットワークの取り組みの実態からオープンガーデンの今後の可能性を探ることを目的としている。

2. オープンガーデン活動の経緯

(1)オープンガーデン活動の始まり

1927年、イギリスで慈善団体のナショナル・ガーデン・スキームが設立され、個人の庭園などを一般の人々に公開し、それに関わる収益を看護や医療など公益団体に寄付するという活動をはじめたことがオープンガーデン活動の始まりと言われている。

(2)日本のオープンガーデン

イギリスに比べると日本におけるオープンガーデンの歴史は浅い。そもそも日本の庭に対する考え方は、基本的に個人の空間(私的空間)として塀や生垣によって囲まれた空間であり、個人の住宅では、庭は家人が楽しむものであって「人に見せる」という考えはなかった。それが「ガーデニング」という海外の影響により考え方が変わり、今では、花や緑を育てる喜び・見る喜び・見せる(人に楽しんでもらう)喜びという考え方が定着しつつある。

日本におけるオープンガーデンは、まちの景観形成によるまちづくりや観光振興を目指している事例が多く、イギリスとは違う日本固有のオープンガーデンが育ちつつある。中でも兵庫県は全国でもオープンガーデンが盛んな地域で、毎年4~5月のピーク時には600~700庭が公開され、県内外から多くの来訪者を迎えて交流しており、地域創生に大きな役割を果たしてきた。

3. 兵庫県におけるオープンガーデンの取り組み

兵庫県のオープンガーデンの取り組みに関しては、2010年の淡路花博「ジャパンフローラ 2000」における盛り上がり为契机に播磨地域や丹波地域、三田市でオープンガーデン組織が発足したことから始まる。

2003年秋には、兵庫県下のオープンガーデングループの交流とオープンガーデンによって市民の街並みや景観に対する意識を高め、美しいまちづくりに寄与することを広報し、それぞれの活動の発展につなげていこうと「兵庫 花と緑のフォーラム」が開催された。翌2004年春には、オープンガーデンに取り組む9グループによって「兵庫オープンガーデンネットワーク」が誕生し(図1)、それ以降毎年フォーラムを開催し、街並みや景観を美しくするまちづくりの大切さを発信してきた。

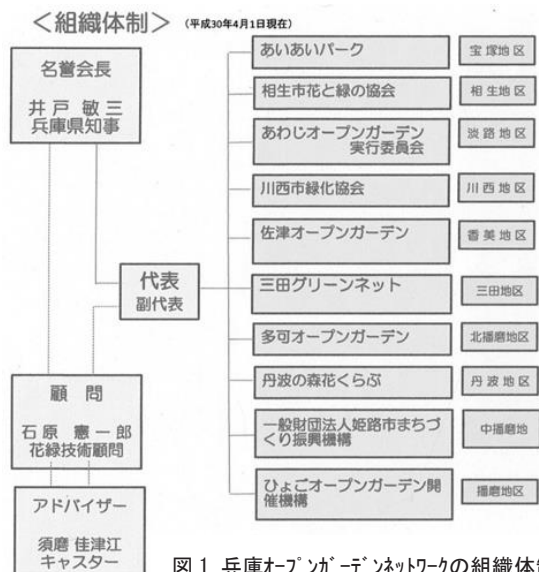


図1 兵庫オープンガーデンネットワークの組織体制

(出典: 公益財団法人 兵庫県園芸・公園協会 花と緑のまちづくりセンター)

2010年4月には、淡路花博「ジャパンフローラ 2000」10周年記念淡路花緑フェアに協賛し、北海道から九州までのオープンガーデン実施団体に呼びかけ「全国オープンガーデンフォーラム in Awaji」を兵庫オープンガーデンネットワークが主体となって開催した。翌2011年の

東日本大震災では、チャリティーバザーを実施し、その売上で購入した球根などを宮城県のオープンガーデン団体を通じて「花と緑の力で 3.11 プロジェクト みやぎ委員会」に贈り、復興を支援するための活動にも取り組んでいる。

2015年5月には、「淡路花博 2015 花緑フェア」に協賛し、宮城県から沖縄県までのオープンガーデン実施団体に呼びかけ、2回目となる「全国オープンガーデンフォーラム in Awaji」を兵庫オープンガーデンネットワークが主体となって開催した。

また、2017年には県下全域 17 団体約 700 庭が参加してオープンガーデンを開催し、翌 2018 年には三田市でオープンガーデンフォーラムが行われ、兵庫県政 150 周年記念事業としてオープンガーデンの新たな役割について、県内外の庭主を集めた交流会が開催された。

4. 調査方法と調査結果

兵庫県内においてオープンガーデンを所管している兵庫オープンガーデンネットワーク事務局(公益財団法人兵庫県園芸・公園協会 花と緑のまちづくりセンター：明石市明石公園 1 番 27 号) 技術顧問、センター長 兼 花緑推進課長にご協力いただき、2019年4月11日(木)に取り組みの現状と抱えている問題・課題等を中心に質的調査として半構造化面接によるインタビュー調査を行い、KJ法に基づいて分析を行った。

表1 インタビュー結果—その1 (オープンガーデン全般)

カテゴリー	サブカテゴリー	語りの主な内容
活動経緯	発端	・花緑に関し花博から全てが始まる。 ・三田市がはしり。(16回まで交流)
	具体的活動	・全国ガーデンフォーラム(5年ごと)を行っている。 ・オープンガーデンとしてのスーパー aster (北海道恵庭市?)との交流が行われた。
	現在の姿	・県内 600 庭 (ネットワークに入っているものでは 440 庭) ・地域再生や「レイド」というように進化してきた。
組織の役割	組織形態	・中間支援組織としての役割を果たし、県下全域を範囲としている。
所属団体の特徴	イギリス型	・三田の場合は、イギリス型 (チャリティ・社会貢献を目的)。そもそも楽しみからスタートしている。(高島氏がリーダー的存在となっていた。)
	私的空間と公的空間	・県立園芸学校の卒業生 7 千人が活躍。 ・オープンガーデンは基本的に個人の庭を対象にしているが、芦屋市のように公共の庭 (空間) を主としているところもある。
	活動の主体	・多可町の場合、観光協会が主体で庭師のグループが活動。 ・宝塚あいあいと川西は第 3 セクター。庭主募集。 ・相生は市の都合で解散→残念。
参加者の思い	参加の目的	・クオリティオブライフ、楽しみ、自分の庭を公開、庭を見せてもらいながら交流(話が広がる)、苗や材料の交換

インタビューは事務局において行い、得られた語りのデータより、語りの内容からカテゴリー、サブカテゴリーに分類し、全般的なものを表 1、課題に関するものを表 2 としてまとめた。

表2 インタビュー結果—その2 (課題に関する分類)

カテゴリー	サブカテゴリー	語りの主な内容
支援	基礎自治体の関わり	・県はやりすぎの感がある。基礎自治体ももっとやらないといけない。
仕組みづくり	助成	・手厚い助成制度の必要性がある。
運営	バスポート制 (三田, 沖繩)	・お金をとること (払うこと) への抵抗がある。参加者数へも影響しているのではないかと。
市民の関わり	グリーンストラテジー	・プラハが「ノータッチ」の感がある。→協働の必要性
人材育成	キーマン 人づくり マンパワー	・東へっていくキーマンが必要。(三田市: 高島氏, 神戸市: 東野氏) ・人づくり、仕組みづくりの必要性。 ・特にマンパワーは重要。
獣害(三田以外)	鹿対策	・鹿、イノシシ、アライグマ。主に鹿。→国もしっかりと積極的に対策を考えるべき。
持続可能性	高齢化 コミュニティとしての存続	・継承が難しい。 ・近隣との関係が悪くなるのでやめる人もいる。音の問題もある。(車や話し声等の騒音) →引場の検討
連携	地域施設	・お寺や神社、教育機関もオープンガーデンに取り込む必要性? →宗教施設であること、セキュリティの観点で難しい面もあるが。
交通	交通(徒歩)	・歩いて行ける距離 ・遠いことによる駐車の問題も大きい。
観光	インバウンド観光	・インバウンド観光への対応

5. おわりに

このようにオープンガーデン活動を積極的に行っている兵庫県を事例に、兵庫オープンガーデンネットワークに直接インタビュー調査を行うことにより、次のことがわかった。①表 1 にもあるように、個人の庭による私的空間だけでなく自治体 (例えば芦屋市) によっては公園等の公共の場による公共空間をオープンガーデンとして積極的に活用していること ②表 2 の課題からは、継続していくためには、自治体による税制等の制度や交通に関する「支援や仕組みづくり」の必要性があること ③「参加者の高齢化」が大きな課題であり、持続していくためにも「人材育成」や「マンパワー」が必要であること ④新たな課題として、「獣害への対応」があること 等。

その他にも、インタビューの中の話にもあった「花と緑」については、今後、医療や健康との関係が注目されることからオープンガーデンにおいても新たな展開の可能性があること等がわかった。

*1 法政大学大学院 政策創造研究科 教授 博士(工学)

* Hosei Graduate School of Regional Policy Design, Prof., Dr. Eng. *1